

雜 錄

實踐的感情移入説に就て

尾 生 光 三 郎

倫理學上で利己主義を破し利他主義を説かんとするならば、勢ひ人間の本性が本來利他的であることをば説かねばならぬ。利己主義は如何にしても道德説とはなり得ない。如何に巧に説明の言辭を弄しても又如何なる假面を着けるにしても合理的な道德原理としては受け納れられない。一見利他的なりと見ゆる行爲も理智を備へた人間の利己的打算に基づいた行爲の習慣化の結果であると言ふ説明にも満足するを得ない、英國心理主義者のとつた様に必ずや利己心を去つた利他的な同情心を人に許さなければならぬ。此の點で道德的

爲の基となるべき同情心に關してヒューム、アダム・スミス等とは別に又是等より一層深い心理學的な説明、所謂科學的心理學的でないにしても一種の心理説に據つたリップスの實踐的感情移入説は一考の價値があると思はれる。

感情移入の考はリップスに始まつたものでなく、唯彼れが之を發展して學説と爲した迄である。又實踐的感情移入説はリップスの感情移入説中でも主要な部分を占めては居らない。リップス自身も狹義な、本來の意味での感情移入説は美的感情移入説であるとしてゐるが同情心の心理學的説明と

しては興味があらうと思はれる。リップスの多くの著書中でも感情移入説は彼れの「美學」に於いては第一卷第二卷に亘つて殊に精細に論ぜられ、「心理學綱要」にもあり、「心理學的研究」第二卷は全部「感情移入の爲めに」となつてゐる。實踐的感情移入説は「美學」や「心理學綱要」にも出てはゐるが、「倫理學の根本問題」に最も詳しく述べられてゐる。

一

リップスは認識には三つの方面があると爲して居る。彼れの説く處に従へば、我々は外界に存する「物」を認め、我自らを認め、最後に我とは異なつた他の自我に就いて知るのである。彼の第一の認識へは感覺的知覺の泉を通じて達し、第二は內面的認識、即ち意識に、或ひは記憶に上り來る自我の把住である、自我其者の規定、要求、行爲、及、感情、並に自我其者の外界の對象に對する關

係の捕捉である。最後に第三種の認識の源泉は感情移入である。而して此の際この語をば廣義に解釋し、我とは異なる對象に於ける自己の客觀化の意味に採るのである。

直接に體驗せらるる自我、意識其者が對象に對する關係は二様あつて、一つは我は或る對象を考へ、夫れを判斷しその者に愉快を感じ、或る時にはその者に近づかんとし、又或る時は夫れに反對せんとする場合である。この第一の關係に在つては思惟し、判斷し、愉快を感じずる我が對象に對立するのである。第二は我は我自らが或る者の中に這入つて思惟し、判斷し、感じてゐることを自ら見出す場合である。幸福げな容貌の中に自ら愉快を感じる、即ち、我の規定が我とは異なるもの、對象に屬する者として體驗する場合である。これ即ち自己客觀化、或ひは廣義に於いての感情移入である。對象の外に我があつて對象に對立してゐ

るのではなく、對象其者の中に、自らを容れて考へるのであつて、この自らを對象の中に容れて感ずることは感情移入を俟つて始めて可能となり、我は感情移入に依つて始めて他の「人」を知ることを得るのである。我々は能く、我々の周圍に多くの「人」を見る、と云ふ。然し乍ら嚴密に言ふならば我々は決して我々の周圍に人を見るものではない我々が眞に見ると稱する處のものは唯人體と、人體の運動と、人の發する音聲とのみである。然るに我々が「人」と稱する時には或ひは運動をしたり、或ひは音聲を發したりする「人體」を意味しはしない。我々が人と稱するは實は「人格」を指して云ふのである。感覺的表象、感情、慾求等を表象すところの存在である、併かも此等の者は凡て感覺機官よりする知覺には上つて來ないのである。此の意味に於いて人は嘗て人を、詳しく言へば、他の「人格」を見たことがないのである、然るに

我々は心の中に他の人格の「心象」^{ピクト}を持つて居るのである。我々は此の他の人格の心象を何處より得たものであらうか、又、此の者は如何なる要素から構成せられてゐるのであらうか。此の問題に對しては可能なる解答は唯一つあるのみで、我々が直接に知り得るものは唯自己の人格ばかりである。従つて自己以外の人格に關するあらゆる心象は自己の人格に關する心象より引き出されなければならぬ、自己の中に見出すものをその儘移して之を他の人格の中にも有るものとするのである。固より斯くの如くして置き換へられたる自己は自己其儘ではないのは明白である、置き換へられる、移入せらるゝものは對象の性質に連れて様々な變化を受ける、自己の人格の輪廓は他の人格の心象となる時には或る點に於いては弱められたり、又、或る點に於いては強められたりするのである。此の改廢の行はれることには別に不思議はない、我

々は我々自らが或る點に於いて異なつて居ることをば希望したり、假定したりすることが出来るのであるが、其處に既に我々自らの變改が思想上行はれて居るのである。同時に我々は他方に於いて思想上我々をば或ひは過去の時に、又或る時は異なつた場所に置くことが出来るのである。斯くの如くして我々は又他人の身體に我々自らを置換することが可能である、我々が他の人格をば考へる時、或ひは他の人格が我々に對し存在する時には此の置換を既に行つてゐるのである。他の人格とは我々の意識にとつては他の身體中に置換せられる、同時に様々に變形せられたる自己の人格に外ならない。

この事情を今少しく詳しく述べて見るに、例へば、茲に、一人の人が悲んでゐるのを我が見るとする。此の時實は我の見るものは唯その人の態度と容貌とに於ける一定の變化とのみである。恐ら

くは涙又は其の他の悲哀の表徴を見るのみであるが、此の涙なり、その表徴なりを以つて悲哀を意味するものとするのは我の解釋に過ぎぬ。併して此の解釋の根據となり得るものは唯自分自身の體験のみである。果して然らば斯くの如き解釋は如何にして行はれるのであらうか。

以上の疑問に對して或る人は類推法に由つて行はれると云つて居る、然し乍ら此の答解は詳しく考ふれば不可能であることが解る、所謂類推法によれば、我々は先づ自己の悲哀が自己の容貌に於ける一定の變化によつて表出せられることを知つて、更に他人の容貌中に是と等しき變化が現はれてゐることを認めて、之に由つて他人が悲哀を感じるものなりと類推すると云ふ順序にならなければならぬ、然し乍ら此の順序は事實に相反してゐる。我々は悲哀を感じながら同時に鏡面に向つて自己の容貌を検査したことは嘗てない筈である、

さればとて我々は直接に自己の顔面を見ることは出来ないのである。悲哀に伴ふ自己の顔付をば先づ知つて而る後に他人の顔付に及ぶといふのは自然の順序ではない、我々が直接に見得るものは唯他人の顔のみである、感情と容貌との相關々係に就いての知識も亦他人の顔付を觀察することによつてのみ得られるのである。悲哀と顔面に於ける

變化との關係は我の顔面を見ることによつては到底知ることを得ないのである。今假りに、我が悲哀を感じてゐるとして、鏡をとつてその時の顔面の變化を檢査せんとするならば既に悲哀の感情は我の中に存しない、斯くすることによりて悲哀に限らず一般に激情は我の心の内よりその姿を隠すことになる。類推法によつては同時に我に認められる二つの者の關係を知り得るのみである、斯くして我の知り得るは自己の悲哀のみである以上、我々は如何にして他人の顔付に表はれる悲哀を認

めることが出来るのであるか、他人の容貌と自己の悲哀とは果して、然らば何に由つて相繋がる様になるのであらうか。是に答ふるものは本能の概念である、多くの場合に於いて我々が道場を求め得るは彼の不可思議なる本能である。

二

我が或る他人の顔面に變化が現はれたのを見る時には何故とはなしに或る定まれる方法に従つて自ら動き、自ら感ぜむとする内面的傾向が自分に生じ來る。併してその自然的なる作用を妨害する事情なき限り此の傾向は事實となつて現はれんとする、只今の場合で云ふならば、その内面的傾向とは悲哀を感ぜむとする傾向である。斯くて我は斯くの如き感情状態に引き入れられて少くとも傾向上悲哀を感ずるに至るのである。併して我は此の惹き起されたる悲哀をば自ら悲しむべき經驗に遭遇した爲めとしてではなく、どこまでも他人の

容貌に由つて惹き起されたものとして感ずる、我の感ずる處に従へば此の悲哀は第一に彼の容貌に結合してゐるものであり、第二には斯くの如き容貌を有するその個人に屬してゐるのである。即ち我は自己の悲哀を、換言すれば斯くの如くして呼び起されたる自己の悲哀を他人の容貌の「中に」移入して「感ずる」のである。此の方法によつて自己の經驗する悲哀は直ちに他人の悲哀と解釋せられる様になり來るのである、感情移入とは實に斯かる事實に命名した名稱である。若しこの悲哀を此の様な容貌をする他人が實際感じてゐるものと假定すれば感情移入とは他人の内面的生活を（此の場合に在つては悲哀を）「共に經驗」^{ミットエルレベン}することである、換言すれば感情移入とは同情である。唯此の際注意すべきは自己の意識にとつては先づ他人の悲哀があつて然る後に自己の同情があるのではなくて、他人の悲哀は、是を一般的に言へば、他人

實踐的感情移入説に就て

の内面的生活と心的個體としての他人其者とは自己の同情、感情移入を基礎として始めて成立するに至るのであつて、従つて同情とは實は他人の感情に同感するのではなくて單純に自己の感情を經驗することである。唯斯くの如き自己の感情は常に他人の感覺的現象に結合してゐるのである。對象と我とを一線の兩端に位するものと考へるなら、^對對象の規定としての我の感情を對象の中に、即ち我の一端を離れて、對象の、他人の、感覺的現象の中に我自らの感情を經驗することである。此の方法によつて他人の身體、他人の感覺的現象は自己にとつては内面的生活を擔ふものとなり、個々の現象は自分にとつて生の發現となり、併して心的個體としての他人は初めて自己にとつて存在するに至るのである。故に他の人格とは自己が自己の人格を材量として造り上げたのである、彼れの内面的生活は自己の内面的生活から採つたもの

である、併かも我の人格に摸倣して他人の人格を作り上げるのではなく内的創造によつたものである、自己以外の個體自己以外の自我は自己以外に在る感覺的現象を所縁とした自己の投影である、云はゞ自己の二重化である。他人の容貌を観ることによつて惹起せられる悲哀は自己の中に固より無より生じ來るものではない、今此の悲哀を経験せんが爲めには自分は既に過去の經驗に依つて悲哀の何たるかを知つて居らなければならぬ。過去の經驗に存せざるもの、記憶に上り來らざるものには感情移入は行はれ様がない、對象其者の經驗が如何なるものであるにせよ、我は唯、我の經驗に規定せられるものである、従つて感情移入に於いては對象其者と我とは各々得たる感情を異にすることが時としてはあり得る。(アダム・スミスが同情の事實を説く際に擧げた例によれば狂氣した者が喜悅の狀態を現はしてゐるにしても

我は喜悅を感ずることは出來ない。唯彼れに同情し得るのみである、又、死者に感覺があると否とを問はずして人は墳墓の冷たさを思ふことがあり得る。過去に經驗した悲哀が今此の容貌を見ることによつて自分の中に「再生」せられるのである、但し、茲に云ふのは單に記憶心象として及び起される、再生せられるといふ意味ではなくて再び實際の經驗となる傾向を含めて云ふのである。感情移入に在つては我が對象を経験するに、我はその對象に屬するもの、我はその對象に横仆はるもの、我は對象を構成する要素なりとして體驗するのである、即ち、我を對象中に投入、或ひは投射して茲に我と對象、主觀と客觀との融合した狀態に達する。従つて感情移入に在つてはアニミズムに於けるが如く總ての物は精神を賦與せられる、小川も樹木も精神化せられ人格化せられる。美觀照に於いて、その對象となるものは「物」ではなくて、

我と等しい人格を備へたもの、否、我の人格を藉りたものであり、更に言へば、對象に規定せられたる我の人格其者に外ならない。斯くして感情移入に依つて、曩きの第三種の認識、我とは全然異なる人格、他の自我の認識が生じ来る。人の感覺的現象、直接に見ることの出来、直接に聞くことと出来る生命現象への感情移入に依つて、我は他の自我を認める。然らば他の自我の感覺的現象への感情移入は如何にして可能なりやと云ふに、此の感覺的現象、即ち、他の自我の生命現象、或ひは感覺的現象を構成する要素とも呼ぶべき外界に起れる現象をば我が精神的に捕捉する際に我の内に作用する特殊なる本能作用により、我の過去の體驗に基づき、先づ我の中に自ら或る方法に作為せんとすの表象起る。併して此の表象はその起原より察せらるゝが如く單純なる記憶表象に留まるのであるが、此の表象せられたるものは我々によ

實踐的感情移入説に就て

りて捕捉せられたる感覺的なるものと直接なる統一を形作り、實際に存在するものゝ如く認められるに至るのである。此の表象せられたるものは我の過去の體驗より出でたるものであるが、併かも再び現在我に體驗せられることゝなり、表象せられたるもの、例へば悲哀とか憤怒とかは我の過去の體驗より我の中に生じたるものであるが、是が再び我の現在の體驗に上り来る。然し乍ら表象せられたるものはあらゆる場合に我の體驗の中に入り來るとは限られない。そのものが我の本質或ひは我の現在の狀態が夫れと等しいか、或ひは等しい方向に走るが故に我が直ちに之を採り入れる場合と、夫れが我の本質或ひは現在の狀態と相容れざるが爲めに我が之を排斥する場合とがある。前者に在つて我は同意の感情を懷き、後者に於いては我は不同意又は反對の感情を得る、前者に在つては我の意識に對しては外圍の感覺的現象に屬す

るものと、我の現在の體驗に上り來るものとは、夫れが我の本質に協ふが故に喜ばしと感ぜられ、之に反し、後者に在つては夫れが我自らの本質と相反するが故に喜ばしくないと感ぜられる。一つは我の同情の對象となり、他は我の排斥する處となる。即ち、前者を肯定的感情移入、後者を否定的感情移入と云ふことが出來るとリッブスは言つて居る。(否定的感情移入とは肯定的感情移入が十分に行はれない、例へば何等か肯定的感情移入の作用を妨げるものがあつて十分に是が行はれない場合を指すのであるかと云ふに、そうではない、肯定的感情移入も否定的の夫れもそれ／＼十分に行はれるときと、然らざるときがあると云ふ。即ち性質の差であるかの如くに解せられる。グレートヒエンには十分であると十分でないにと拘はらず常に肯定的感情移入はれ、メフィストフェレスに對しては常に否定的感情移入が行はれる。同じ

場面を見ながら我々は一方では肯定的感情移入、同情、同感を感じながら、同時に他方に於ては敵役に對して或々は否定的に感情を移入する、即ち、我は同時に全く相反せる異種類の感情を懷くこととなる。又否定的感情移入と稱する、既に異様な言ひ表はし方であると考へられる。我々はメフィストの如きに否定的になりとも感情移入、又は同感の作用を行ふ。即ち、彼の内に自己其者を移入するとは考へ難い。

三

茲に云ふ感情移入の本能をば今少しく詳細に論ぜんに、以上に云ふ本能、又は、衝動は二つの衝動に分たれる。一つは生命發現の衝動或ひは身體的發現に依つて内面的過程を外部に發表せんととの衝動と今一つは外部的模倣の衝動とである。此の兩衝動の交互作用を認めることは容易である、我は嘗て悲哀を感じたることありと假定する、その

際には我は悲哀の容貌を發表する傾向を得る、併かも我は此の傾向が悲哀と相並んで (nebeneinander) 存するとは體驗せずして、此の傾向は其の者の中に (ineinander) 存するものとして體驗するのである。我はその傾向に従つて、本能的作用によつてその容貌を我の中に呼び入れたることありとする、併して今我は此の容貌を何處にか認めたりとする。然らば再び直接に知覺に、精確に言ふならば、此の容貌の我の統覺に現に自ら悲哀を産出せんとする傾向が存在するのである。此の傾向は到底分け離すことの出来ない要素として、我の悲哀其者に既に存在する傾向である。故に此の傾向の生起は同時に悲哀の再生を含んでゐるのである。容貌への感情移入に續いて意慾的運動への感情移入が起り來り、意慾的運動の知覺或ひは統覺は我の見たる運動に等しき運動への衝動、又は刺激を與へる、即ち、模倣運動への刺激を傳へるの

實踐的感情移入説に就て

である。

十分なる肯定的感情移入の行はれる處には我に對し、唯、單一なる自我あるのみである。外界の對象に移入せられたる、或ひは客觀化せられたる、或ひは投射せられたる我自らの自我あるのみである。否、我の自我と云ふべきでなく、唯單一なる自我あるのみで、我の自我とは稱すべきではない。曩きの第二種の認識からは我自らの自我を內的經驗によつて知るのみであり、我以外に猶自我と稱すべきもの、存在することは知られないのである、従つて殊更に他のものと區別して我の自我と云ふ必要がない。感情移入の本能を俟つて始めて我とは異なる自我に接したる時も猶感情移入が十分に作用してゐる間は自他の區別を立て様がない、否自他の別は全く存しない筈である、自我は能く非難せられる如く個人的なものではなくて、非個人的なものである。始めて我が十分なる

感情移入を離れたる時、是に反省を加へたる時、果又、否定的感情移入に於いて我は外的對象より離れ、我自らの身體に依屬するものなることに氣づくのである、即ち、茲に彼の單一なる自我の分裂が起り、多數の自我中の我の自我とか、彼れの自我とかの別が生じ來るのである。

客觀化されたる我の自我、或ひは自我客觀化によつて我に生じたる他の自我は直ちに客觀的實在なりと思惟せられる、此の事實は他の類似のもの、感覺的に認められる事實、乃至は内面的認識によりて認めらるゝものゝ何れにも還元せられることが出來ない、此の事實を通じて自己客觀化は他の二種類の認識と相並んで第三の認識の源泉となる。以上三つの本能作用の事實は、各々のものを他の者に還元することが出來ない、即ち、實在の意識は夫れが感覺的知覺に依ると、記憶表象によると、果又、自己客觀化の何れによるとを問は

ず夫れ以上のものに還元し得ざる本能によるものである。本能は我々の實在認識のあらゆる基礎である。斯く言へばとて直ちに此の本能の斷定は確實なる認識なりと云ふのではない、猶之に必要なは此の本能の斷定は理性の法則或ひは論理的法則の下に持ち來たされざるべからざることである。實在認識は理性の法則に遵ひ、同時に彼の三様の本能の斷定の整理せられたる體系である。夫れ故に一般に「正しきもの」とは合理的になつた、即ち、理性の法則の下に持ち來たされたる自然的なるもの、又は本能的なるものである。認識に達すといふこと、「正しく」考へるといふこととは全く同一事である。

是等の體系に在つては、感觀的知覺、記憶及自己客觀化の斷定は理性の法則に遵つて相互に修正を受ける。三様の本能の斷定中此の法則によつて修正せられざるものは「假象」又は「幻覺」と名付け

られる。夫れ故に實在認識の各方面に亘つて眞理とは彼の三様の本能の斷定に非らずして理性の允許を受けたそれ等の斷定である。斯くの如くして凡て移入せられたるもの、而して實在なりと想定せられたるものも必ずしも客觀的實在ではない。理性の法則に従つて假象的なるものと、實在なるものとの別が生れる、感情移入に依る最初の印象は假象であり、幻覺である場合があり得る。例へば我は他人の親切げな顔を見たりとする、併かも實際經驗は此の顔の持主が決して親切な人間でないことを教へる、即ち、最初の印象は假象であるとして茲に修正せられる。

併して感情移入の修正をするものは再び同じく本能的な感情移入である。而して此の修正せられたる先きの感情移入も第一次的な、直接印象に留まることを敢て妨げない。親切らしい顔付の裏面には冷淡、不親切、惡意等が包藏せられてゐるこ

實踐的感情移入説に就て

とを知つた後と雖親切げな顔は依然として我に對し親切らしいといふ印象を與へるものである。彼の感情移入の修正に關し特に注意すべきことは我々は個々の精神的感激を移入するのみならず、是等が一個人の意識と關係あることである。我々の意識的内容は個々別々に孤立せるものではなく、全人格の統一體を構成する要素である。彼等は全人格中に相互に結合し、我々にとつては唯斯くの如きものとして意識の對象となり得るのである。

是と同様に感覺的知覺の對象に移入せられたる内的なるもの、或ひは精神的なるものは、夫れの實在性が我々に確められた時には自己の個性と同様に個性の統一に歸せしめられなければならぬ。假りに我が感覺的に認められたる對象中に精神的なるものを移入し、併かも夫れ以上には之の對象の中に、我自らに在つては必然的に屬するものを

ば移入し得ずとしたならば彼の最初の移入したるものをば我は最早實在なるものと認めることが出来ない。

四

上述の感情移入の修正とは悟性に對してのことである。移入せられたるものが果して客觀的實在なりや否やとの悟性の疑問を發する際に行はれるのである。實踐的、倫理的考察は此の疑問をば提出する。之に反し美的考察はその本性上斯かる疑問を提出しない、然し乍らその他の點に於いては美的考察に對し感情移入の事實はその原本的な範圍に於いて行はれる。就中總ての移入せられたるものに對し、移入せられたるもの、我自らの體驗の事實は依然として存在する、然しながら此の同感たるや彼の特殊なる美的同感であつて、あらゆる實在問題から遠ざかつた、內的なるもの、或ひは精神的なるもの、同感である。美觀照に在つて

は之の對象が實在であると否とは問ふ處ではない、假象又可なりである、美的假象論の起るのも斯かる點にあるのである。然し乍ら實は美觀照其者に在つては實在とか假象とかの問題は起り得ないのである、美的體驗其者に於いては對象はすべて實在の相をとるのである。

又、感情移入は夫れが狹義に於いての感情移入、即ち、我の中に感ぜられたるもの、感情移入である限りに於いては美的感情移入は要するに常に內的作爲の感情移入である。我々が自ら肯定的に移入し得るものは我々之を呼んで美と爲し、之に對し否定的な美的感情移入は我々は醜と呼ぶ。之に反し實踐的、特に、倫理感情移入は移入せられたるもの、實在意識をば伴つた感情移入である。是は極めて重要な事實であつて美的感情移入と實踐的感情移入との對立は正に實在の意識を伴ふや否やに存する。美的感情移入は現實に協つて

ゐるか否かの意識、即ち知とは一切無關係に直接印象のみに依る感情移入である。然るに實踐的感情移入は對象の實在性の意識を伴ふのである、若しくは少くとも夫れが當ると否とに拘はらず現實に協つてゐることを要求する、即ち、對象に關する知を含んで居るのである。對象の中に己自らを經驗ある點に於いては美的感情移入と實踐的感情移入との間には何等の徑庭がないのである。併し美的感情移入は移入せられたる感情が現實的なるか非現實的なるかの問題とは何等の關係なきが故に常に現實を目標としてゐる處の、少くとも現實的あるといふ意識を根本假定としてゐる實踐的態度を動かす力はないが、之に反して實踐的感情移入は實踐上動機を與へる力を有してゐる。人は苟しくも他人の心情に就いて知れば、例へば、人が或る願望を懷いてゐることを知れば、その實現を妨ぐる事情の存せざる限り、自ら自己の願望と等

實踐的感情移入説に就て

しく此の他人の願望によつて規定せられずには居られない。斯くして人は他人の願望を満さむとする自然的な衝動を感ずるのである。又、單に願望のみならず、他人の憂慮、判斷に就いても亦同様である、他人の内面的態度は自分がそれを知つてゐる限りそれに對應する自己の内面的態度となる傾向を持つてゐる。之は原本的な心理的必然性に從つて行はれるのである。

美的感情移入が實踐上動機を與へる力を有してゐないことは一面に於いてはその缺點であると言はれるが、他面に於いては却つてその長所である。所謂はねばならぬ。美的感情移入の態度は現實、非現實の問題に捉へられることなきが故に自ら現實的利害の範圍から脱することが出来るからである。藝術中に表現せられたる人物は我を害することも出来なければ、さればとて我を裨益することも無論出来るものではない。美觀照の本質は一切

の利害や願望を忘れて藝術の世界に没入する處にあるが故に固より藝術品に表はされたる人物はその有する願望を持つて私の願望を妨害することは出来ない、否、美的態度に在つては既に私の願望といふべきものが一切斷たれてゐる筈である。それ故に實踐的生活に於いては反對な利己心によつて利害せられ、或ひは全然壓倒せられることあり得る同情は美的觀照に於いて純粹に十分にその特質の儘に行はれる。美的感情移入の事實を俟つて我々は同情の本質を十分に認め得るのである。

然らば美的感情移入に於いて十分に發揮表現せられる同情の本質より我々は果して何を學び得るのであらうか。假りに同情とは他人の願望、意慾、歡喜及苦痛に基づく利己的關心の悉くが除去せられる處に十分なその力を示すものとすれば同情とは必然的に利己的關心に對して獨立せるものであらねばならぬ。同情は利己心から引き出されるこ

とも、又夫れに依つて説明せられることも決して出来るものではない、同情が行はれる限り利他心は我々の内にその獨立の根底を有するものと見做すべきである。

實踐的感情移入の存するに依つて自然的に、即ち、人爲的なる施設を俟たずして個人と個人とを內的に結合する關係が成立し、此の關係よりして自然的社會、自然的社會有機體が生じ來る。實踐的感情移入は始め單純なる意識作用である、內的なるものが對象に即したものととして表象せられるのである、此の表象は然し乍ら同時に表象せられるもの、體驗の傾向である、此の事實をば我々は特殊なる法則の形で表はすことが出来る、即ち、表象せられたる、觀照せられたる對象其者はその傾向上十分に體驗せられるものなりとの法則にて表はすことが出来る。更に我々は特殊の命題で是を言ひ表はすことが出来る、私の知り、且つ私の

觀照する他の者に於ける各々の内的態度は、その傾向上夫れに對應した現在の私の態度であると、約言せば、斯かる條件の下に同感の傾向生ずと。

更に我々は之に猶一つの追加を爲さなければならぬ。斯くの如く同感せられたるものは同時に「客觀性」の特有なる感情の特性、即ち「當爲」(Sollan)の性質を得ることとなる。今、我は他の者の中に或る態度、或る判斷、或る意見、或る價值、努力又は執意に就いて知れりとする、此の場合に我の中に同感の傾向生じ、此の傾向は我の中に當爲の性質を帯び來るのである。

又或る場合には我は他の者に對する内的態度を知れりと假定する、例へば、彼れが我を尊敬し、愛するを知れりとする、即ち、彼れの態度は我自らの肯定なりと假定する。斯かる場合彼れの内的態度は我に逆に反對せられ是に由つて私の内に生ずる我を尊敬せんとする傾向は客觀性を得るこ

ととなり、斯くて我は我自らを尊敬せざるべからざるに至る。總て斯くの如き同感をば我々をば同情、又は、同情的同感と呼ぶことが出來るとリッブスは言つてゐる。

五

感情移入説に關しては、特に美的感情移入説に關しては、幸ひに屢々論ぜられて居るからこれに就いては今更新らしく述べる必要はない、實踐的感情移入説を批評せんとするならば、唯、實踐的感情移入説に對する批評を美的感情移入説に對する批評と相對せしめて、此の兩者が等しき筈であるか、或は異なるべき筈であるかを觀れば十分であると思ふ。實踐的感情移入説なるものは必竟一種の實踐的態度の心理學的説明であるから是が學説として成立するか成立しないかは一に心理學其者の如何によることである。智情意をば意識の三方面、或ひは各々獨立なる三つの能力であると

云ふ風に、極力是等の間に區別を立てんとする所謂科學的、説明的心理學と調和し得ないことは云ふまでもないが、意識其者に關する見解の立て方の如何によつては學説として成立し得べきであらう。實踐的感情移入に於いて移入せらるゝ感情が實際感情であるか實際感情でないかの疑問に關しても、移入説の當然假定しなければならぬ實際感情説をとつて移入せられたる感情は觀念的なるものではなく、實際感情であることも許されるであらう。是は美的感情移入の場合に較べて一層容易に認められる様である、何故かならば美的感情移入に於けるよりも多くの實際的要素が加はつて來て居るからである。然し乍ら此の實際的要素の這入つて來て居ることは美的感情移入と實踐的感情移入とを著しく異なるものからしめてゐる。美的感情移入に在つては既に説けるが如く對象の實在性は問題に上らず、所謂美的假象であり、又、

所謂無關心であつたものが實踐的感情移入に在つては對象の實在意識を伴ひ少くともその實在性を要求し、又、實際的興味、關心が這入つて來てゐる。必ずしも全然利己的な實際的興味であることと必要とはしないが、既に假象の世界は去つて、實際的興味——自他の分裂を考へて他人のそれに對し殊に自己の關心、實際的興味と解しないまでも兎も角實踐的世界に活動する自我の有すべき——が這入つて來てゐる。實在意識や實際的興味の伴ふことによつて我と對象との融合、融一が十分に説けるか如何が問題となる。少くとも現實的要素が益々多くなればなる程、否定的感情移入の起る機會が多くなり、又、肯定的の夫れにしても十分に行はれない場合が増して來はしないか。斯くして我と對象との分離が屢々行はれるのではないであらうか、感情移入説は我と對象との十全なる融合を説く點に甚だ興味がある様であるが、

此の融一が怪しくなりはしないかと思はれる。

又、美的感情移入に於いて美的感情と價值判斷、美的認識と美的評價との起る前後に就いて議論があるが（無論此の兩者を區別せんとするとせざるとは纏て感情移入説の立場を捨てるか捨てないかの分岐點であり、感情移入説にとつては死活問題であるが）實踐的感情と、實踐的價值判斷、即ち、智の作きと今一つは意思作用が加はつて來るから、智情意の作用する順序——夫れが分たれるものならば——又、夫れ等の相互關係等に關しても問題が起ると思ふ。感情移入に於いて移入せられるものは本來「感じられたるもの」であると能く理解せられるが夫れを單純に感情のみの作用と見做しては、殊に實踐的感情移入は理解されないものである。感情及意識其者に關する心理學説の改造を必要とするとは云ふまでもない。

實踐的感情移入の作用はその内に既に實踐的價

實踐的感情移入説に就て

値判斷、實踐的評價が含まれてゐると解すべきであらうが、その評價は何に基づいて行ふのであるか、唯我の經驗の事實に基づいて、本能的に、或ひは肯定的に、或ひは否定的に我の感情を移入することのみ善惡の標準を置くならば或ひは餘りに主觀的であるとの非難も起り得るであらう。

同情心に關する一つの心理學的説明として觀るならばリップスの此の實踐的感情移入説は興味のあるものではあるが、此の實踐的感情移入を持ち來つたことによつて彼れの感情移入説一般に（狹義に於ける美的感情移入説へも）一つの混亂が持ち來たされた、或ひは少くとも元來理解に容易ならざる移入説が益々理解に困難を感じる様になつたと断言し得るであらう。